LOOKING FOR LOVE

ルッキング・フォー・ラヴ

by S. Pearcy, R. Crosby, J. Croucier

Copyright © 1986 by TIME COAST MUSIC / RATT MUSIC
Rights for Japan assigned to WATANABE MUSIC PUBLISHING CO., LTD.

■この曲のポイント

ヘビーで印象的なリフに始まり、ラストも同じヘビーなリフの繰り返しで終わるため、曲全体が非常に重たい感じになってしまいそうだが、ハイ・トーンのボーカルとコーラスとでポップな仕上がりになっている。

GUITAR：白玉(ロング・トーン)でユニゾンやオクターブ・ユニゾンの音を弾くため、わずかなチューニングの狂いでもたいへん不快に響いてしまう。特にチューニングに気を配ってほしい曲だ。Eのギター・ソロはオーソドックスながら、たいへん良く組み立てられている。

BASS：ギターのリフとユニゾン、ベースのみのリフ、コードをフォロー、というように、単調なリズムの中で動きのあるベースなので、フィンガリングに十分気を配って音の途切れることがないようにしたい。Eのギター・ソロのバッキングでのベース・ラインは特に注意。

DRUMS：リズム・パターンを叩いている時は、だいたいアルバム中の他曲と同様なのだが、フィルインのフレーズは派手なものが多く、曲をよりヘビーに演出している。フラム打ちはタイミングに注意して、耳につかない程度に。

❶(Gt.)：ヘヴィーなリフ。低音弦の単音弾きは、微妙にピッキング・ハーモニクスの音を加えてやると、音がより前に出てくるものだ。

❷(Ba.)：ギターのリフとユニゾンだが、ベースの4弦のロー・ポジションは芯のある音で弾かないと、音が前に出てこない。右手、左手ともにカッチリと。

❸(Gt.)：2本のギターは完全にユニゾンではなく、高さが一部違ったりしている。2本を完全にピッタリ合わせようとするより、両者がそれぞれのリズム感でしっかり弾き、自然にノリが合うように。

❹(Ba.)：1小節パターンのラインを繰り返し、4小節目ごとにフィルインのラインを弾いている。2、3弦を弾く時は⅚の音を完全に止めるように。

❺(Ba.)：コード・チェンジをなめらかにする音の動かし方に注目。こういうラインはできるだけ数多くストックしておいてほしいものだ。

❻(Gt.)：ヘヴィ・メタによく出るコード・フォーム。3度抜きで9度がついたこのコードは、あいまいな響きなので、メジャーでもマイナーでも使いみちは多いはずだ。

❼(Dr.)：フラムのタイミングに注意。

❽(Dr.)：ベードラの4連発は、スピードについていけるならツー・バスを使うよりワン・バスで力いっぱい踏んだ方が、重いノリが出やすい。

❾(Gt.)：ふたつの和音をスピーディに切り換え、しかも濁らないように弾くのは意外に難しいはずだ。フィンガリングを工夫しよう。

❿(Ba.)：ルート、♭3rd、5thを使った規則的なパターンを、コード・チェンジに沿って弾く。C、Dの時のフィンガリングをスムーズに。

⓫(Gt.)：カッコ内は、出ているようなそうでないような、あいまいな音だ。5度を強めにミュートして軽くピッキングする感じ。

⓬(Gt.)：ルーズなリズムで弾いているので、だいたいの符割で採譜してある。

⓫(Gt.)：4～2弦を一息にダウン・ピッキング、続いて♭5を4度チョーキング。思い切りが必要な部分だ。

⓬(Gt.)：スケール練習のようなフレーズだが、ちょっともたついた感じで弾いている（弾いてしまった）ようだ。

⓭(Gt.)：♭5のD音をキープしたままのコード・チェンジ。どちらのフォームもロック・ギターのロー・コードとしてポピュラーなものだ。

⑯(Gt.)：ディレイ・タイムをちょうど2拍分にセットしたディレイが1回、フレーズを追いかけるように出てくる。このディレイは曲のラストまでかけっぱなしだ。

⓱(Gt.)：「2：5」は2拍のスペースに音が5つ、という意味。

⓲(Gt.)：オーソドックスな、いわゆるラン奏法だが、ため気味に弾いている。

⓳(Gt.)：単なるG7のアルペジオだが、ポジションのとり方でこんなフレーズに仕上がる。これはいろいろと応用できるはずだ。